

「意思決定支援」研修補足

■スライド3

□福祉用具利用の目的として、香川講師としては「⑤健康の保障・尊厳の保障」を盛り込むべきではと感じている

■スライド6

□現場における2次障害は、健康状態の悪化を引き金に、「不適切な環境・不適切なケア」によってもたらされる「骨折・内出血・内蔵機能の低下・拘縮・排泄障害・拘縮・自律神経の低下・褥瘡」…など

◆例1：脱水による入院⇒入院中に4か所褥瘡発生

◆例2：脳梗塞後遺症片麻痺後に、非麻痺側や頸部も拘縮

□2次障害を予防するために…

◆セラピストが、セラピストにしかできないことをやってはいけない

◆どう生活に落とし込んでいくかを考えなければならない

◆そのために、生活の中の「不快な要素」を排除していく必要がある

◆「不快な要素」とは、「苦痛・不安」「力任せな介助」「抱え上げること」「不眠」「福祉用具の不適切な使用」などである

■スライド9

□1回のリハビリは、リハビリ以外の時間を支援するためのマネジメントの時間と考える

□リハビリ時間のみの「点」で関わらない！

■スライド10

□低次の欲求が満たされてこそその「外出・外泊」であり、自己実現欲求や尊厳欲求などの高次の欲求に繋がる

■スライド17-20

□シーティングの基本として、

①脚長と座面の高さを合わせる（※最低限、ここだけは必ずする！）

②座面奥行きと大腿長を合わせる

③アームレストの高さを合わせる

④背張り調整（胸腰椎の湾曲に合わせる）

□北欧と日本とでは、ティルト型車いすに対する考え方がそもそも違う。

◆北欧→姿勢を保持して自走する（ティルト型「自走」車いすが主流）

◆日本→寝たきりの人が座る

◆日本の発想では手遅れ！

□「車いすを体に合わせる」だけでは限界がある。

□どこの安定性を高めたいか、「目的に応じた適切な使い方」をする必要がある

■スライド21

□マットレスは素材×姿勢評価、で選定する

■スライド 22

□セラピストが重点的に評価すべきは、
②原因、④ずれの排除、⑥安定性

■スライド 24

□ポジショニング＝「隙間を埋める」、は、誤解を招く言い方
□筋緊張を和らげるために「重さを分散させる」という伝え方もある
□体験してもらって、「何だか楽そうだね」と思わせることが大事！

■スライド 27

□スライディングボード選定のポイント
①滑りやすさ、②しなりやすさ

■スライド 28

□マイティエースミクニの特徴
◆メリット：垂直方向の移動が楽。ベッド上や車いす上のズレを修正しやすい。
◆デメリット：カクカク動く（他メーカーと比較）

■スライド 29

□リフトが姿勢と筋緊張へ与える影響は大きい
□拘縮緩和、筋緊張軽減を、スキル・経験に関係なく一定の移乗が可能
□実際にリフトを使用すると、シートによって座骨～大腿へ自然な荷重がかかり、支持基底面を作ることができる。座位 Ex になる！
□リフトを使用するのは、生活を楽にする、という目的がある。常時（1日24時間）リハビリ時間として頑張る必要があるか？頑張る必要のあるタイミングはどこか？を考える

■スライド 30

□HCRなどで自分なりの特徴をつかむ体験をしてみる
□グルドマン ベーシックハイ（アビリティーズケアネット社）の特徴：少し固めで滑る、形状保持性がある
□日本製・海外製のシートの違いは、1番はサイズが違うこと。それ以外にも、
◆日本製：カチッと姿勢矯正・保持をしてくれる
◆海外製：安楽性の提供

■スライド 31

□スカイリフト（アイ・ソネックス社製）は、類似の移乗リフトの中では唯一、直立姿勢までの立ち上がりサポートがある

■スライド 32-33

□排泄と姿勢は非常に密接な関係にある。直腸と肛門の位置関係は、通常は90度だが、前傾位を取ること
で約130度程度の傾斜がつき、ほぼ一直線となる。排便を促す＝前傾を促すことになる

■スライド 37

□オムツのテープの止め方、履き方で座位姿勢が変わってくる。排泄支援なのに、そもそも排便しにくい装着状態になっていないか？

■スライド 38

□総括として、

①セラピストの職分：物×動き×生活をつなぐこと

②福祉用具業者は「物」そのもの（素材・他製品との違い。etc...）についての専門家

③自分の職分を理解して、「その利用者さんにどういう過ごし方をしてもらいたいか」、「どういう効果をもたらしたいか」を他職種・他者にしっかり伝えて繋いでいく

■スライド 40

□急性期、回復期、生活期、終末期、共通の Vision を整える

□生活期を見据えた共通 Vision「どういう風に人生を過ごしてもらいたいか」が、見えてくれば、終末期も自然と整う

□各ステージごとに役割は違うので、アプローチは違って当然

□予防のためには少し早めの対応を！

■スライド 41

□生活支援のために、「単位 or 効果」ではなく、「単位<<効果」

□費用対効果は本人が決めること。

◆例：本人にとって良い効果をもたらすであろう福祉用具の提案に対し、「でも単位がオーバーしてしまうから…（導入は難しい）」とCMが言った場合

→「これを使うと、〇〇のような効果があって、××という風に生活が変わるんですよ、機能維持（増悪予防）ができる効果があるんですよ」…

→しっかりイメージ喚起できるような伝え方をし、お客様に「選択肢を提示する」「選択肢を増やす」という考え方を持つことが大事！